

## ルカによる福音書19章41-44節 「あなたへの訪れの時」

### 1A 今日、訪れる救い

#### 1B イスラエルに訪れる日

1C 苦しみの後の油注ぎ

2C 柔和な王

#### 2B 主のお入用

#### 3B 公のエルサレム入城

1C 早急なメシア称賛の拒否

2C 「この時」

#### 4B 訪れの日の喜び

### 2A 泣かれる主 41-44

#### 1B 目から隠されていた日 41-42

1C 商売(保身)

2C 宗教指導者への依存

3C 肉の誇り

#### 2B 平和の道を知らない都 43-44

1C 敵の包囲

2C 子供たちへの虐殺

3C 積み残されない石

#### 3B 訪れの時を知らない悲しみ

## 本文

ルカによる福音書 19 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 19 章 10 節まで来ました。午後に 11 節から最後、48 節まで一節ずつ読んでいきますが、今朝は 41-44 節に注目したいと思います。

41 エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。42 「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。43 やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、44 そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積み残したまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。」

イエス様がついに、エルサレムに入城されました。前回、イエス様がエリコの中に入られたとこ

ろを見ました。エリコからエルサレムは、一日の道のりです。そこからエルサレムまでは、なんと高低 1 キロにもなり上り坂ではありますが、それで都上りと言っても相応しい道になっています。そして時は、過越の祭りに近づいています。大勢のユダヤ人の巡礼者もこの道を歩いていることでしょう。そしてエルサレムに到着しました。イエス様はこの日のことを、ずっと心の深くに留めておられて、ルカによる福音書では、9 章 51 節に、「さて、天に上げられる日が近づいて来たころのことであった。イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた。」とあります。しかし、人々は、一部の弟子たちは大喜びで、主の御名をほめたたえたものの、エルサレムとしてはこの方を拒み、見捨て、ローマ人に引き渡す決断をします。今、読んだところは、イエス様がエルサレムを愛する愛のゆえに、神の訪れの日をその心の鈍さのゆえに知らなかったことを泣き、嘆いておられる箇所です。今、オリブ山におられて、その山腹からは、鮮やかに城壁に囲まれた町、黄金の神殿を眺めることができます。そこで主は涙を流され、泣き崩れたのです。イエス様は、悲しみの人であるとイザヤ書 53 章に書いてあります。愛してやまない人々が、神に逆らっている姿を見て深く悲しんでおられるのです。

ところで、エリコにおいて、取税人ザアカイの家に、イエス様が訪れて、そこで神の救いが彼に訪れたところを読みましたね。ザアカイは大喜びでイエス様をお迎えし、そして、自分の財産の半分を貧しい人に施し、脅し取った物があれば、四倍にして返しますと言いました。そしてイエス様は、「19:9 今日、救いがこの家に来ました。」と言われました。今日というのは、神の救いの日、その機会が与えられている時ということです。神は忍耐して、人が悔い改めるのを待っておられますが、人々を救おうとして手を伸ばしておられる時があり、そのように定めておられる時があります。イザヤはそのような時を次のように語りました。「55:6-7 【主】を求めよ、お会いできる間に。呼び求めよ、近くにおられるうちに。悪しき者は自分の道を、不法者は自分のはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。」イエス様が、ザアカイのところに、「19:5 今日、あなたの家に泊まることにしているから。」と言われた時に、その時にザアカイがイエス様を迎え入れたら、罪の赦しを豊かに受けることができたように、私たちにも、神の平安を、神の罪の赦しを、イエス様の呼びかけにそのまま応答することによって、受け取れることができます。

私たち人間はしばしば、「いや、今は自分のやりたいようにさせてください。自分の計画や願望がありますから。都合がいたら、神の訪れを受け入れるようにすればいいですね。」と考えます。いいえ、そのように考えているということは、すでにかなり心が神から離れており、訪れの日を鈍い心のために知らないままです。それが、イエス様が入城された時のエルサレムの姿でした。

### 1A 今日、訪れる救い

### 1B イスラエルに訪れる日

イエス様は、42 節で「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。」と言われて

います。「この日」ということを語っておられます。主は、ユダヤ人のために、聖なる都のために、その罪を赦し、清め、神の正義で輝かせてくださる日を定めておられました。神の平和がエルサレムから広がり、支配する日を定めておられました。それがこの日であることを語っておられます。

### 1C 苦しみの後の油注ぎ

私たちの人生で、いろいろな苦しみを経て来た人たちがいるかもしれません。いや、キリスト者であれば、何らかの試練があり、葛藤があり、悩みがあり、あるいは問題はなくとも虚しさがあったことでしょう。しかし、主が近づいてくださり、呼んでくださり、そして慰めを受けることができました。

聖書では、ユダヤ人が民族として長い歴史を通して、苦しみを経た後の慰めを約束しておられたのです。ダニエル書 9 章で、バビロンによって捕え移され、長いことその地域に住んでいたダニエルが、エルサレムに向って窓を開け、祈りを捧げている姿が出て来ます。彼は先祖たちが犯した罪を嘆き、悔い改め、主に憐れみを願っていました。そこに天使ガブリエルがやってきたのです。そして、主からの使信を彼に伝えました。「9:24 あなたの民とあなたの聖なる都について、七十週が定められている。それは、背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の宥めを行い、永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油注ぎを行うためである。」このように、主が罪の赦しを与えることを、七十週を定めていると教えてくださったのです。ここでは日は一年を指していますので、週は七年のことです。つまり、7かける70で 490 年です。そして、次 25 節は、口語訳のほうが分かり易いので、そちらを引用します。「それゆえ、エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもって、建て直されるでしょう。」不安な時代があると言っています。苦しみの期間です。けれども、七週と六十二週の後メシヤなるひとりの君が来ると約束してくださったのです。つまり、483 年後にメシヤが来ると主は約束してくださったのです。

これを聖書学者たちは計算をしました。エルサレムを建て直せという命令は、ネヘミヤ記 2 章から紀元前 445 年 3 月 14 日であることが分かっています。バビロンの暦は一年が 360 日で、それにしたがって計算すると、紀元後 30 年辺りになります。そして、さらに日数を数えた人もいて、それが、ちょうどイエス様がエルサレムに入城するまさにその日であると結論づけました。イエス様がお生まれになった日を、東方からの博士が計算してそれでエルサレムに来ましたね。同じように、預言によってメシヤが来られる時が特定できるまで、神はダニエルを通してユダヤ人に、その訪れの時を教えてくださいました。

### 2C 柔和な王

そして、預言者ゼカリヤにも、主がどのように来られるかを教えておられました。「9:9 娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」このような日が

来ることを、人々は予め知らされていたのです。

## 2B 主のお入用

日本人にとって、間もなく大きな日がやってきますね。即位の礼の日で、10月22日です。天皇が生前に退位されるということは、歴史的にとっても珍しいとされていましたが、すでにいつ、徳仁さまが天皇になり、また即位されるかは、はっきり定めることができました。今も用意周到な準備をしていますね、台風の被害があるので、パレード(祝賀御列の儀)を延期にしたとのことですが、そうやってその日のためにじっくりと備えます。

人間の国では、こうやって国ごぞってその王の即位のために準備を整えますが、イエス様は、へりくだり、乗られるのはろばの子、そして用意するのは、弟子たちに指示して、ご自分で用意されました。弟子たちに、向こうの村に行き、そこの、まだ誰も乗ったことのない子ろばがつながれているから、それをほどこいて、連れて来なさい、と指示しました。持ち主から、「どうして、ほどこのか」と言われたら、「主がお入り用なのです」と言いなさいと、いいつけました。そして、イエス様が乗られようとする時に、弟子たちが自分たちの上着を掛けます。そして、進んで行かれると、弟子たちが自分たちの上着を道に敷きました。王が通られるところに、自分の大切な着物を敷いて絨毯がわりしたのです。

## 3B 公のエルサレム入城

### 1C 早急なメシア称賛の拒否

イエス様は、この時には公にご自身がメシアだとして称賛しているのを、そのままにされました。公にメシアであることを知られるようにされました。弟子たちが大声で神を賛美し始めて、こう言いました。「19:38 祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように。」それは、詩篇 118 篇から、メシアを称える歌なのです。それでパリサイ派の人たちが怒りました、「先生、あなたの弟子たちを叱ってください。」するとイエス様は、叱るところか、「19:40 わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」ここまで公にされたのです。

### 2C 「この時」

けれども、覚えていますでしょうか、イエス様はご自身がメシアとして祭り上げられることを、それまではかなり警戒しておられました。イエス様は、らい病人を治された時に、「決して言わないで、y 清められたことを祭司に見せなさい。」と言われました。そしてピリポ・カイサリアで、ペテロが、イエス様が生ける神の御子キリストであると告白した時、他の者たちに決して話してはならないと厳しく命じられました。公にしないので、肉の兄弟たちが、なんで公にしないのかとたしなめたほどだったのです。「7:3-4 ここを去ってユダヤに行きなさい。そうすれば、弟子たちもあなたがしている働きを見ることができます。自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。こ

のようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。」五千人の給食の奇跡を行われた時、満腹した人たちはイエス様を王として担ぎ上げようとしているのを知り、「6:15 ただ一人で山に退かれた。」ともあります。ヨハネの福音書では、「わたしの時はまだ来ていない。」という言葉がたくさん出て来ます。ところが、12 章には、「わたしはこの時に至ったのだ。」とされているのです。エルサレムに入城された後にそう言われました(27 節)。

喩えの中で、王子の祝宴がありますね。多くの準備が必要です。それでもって初めて、祝宴を開くことができます。イエス様も同じようにして、イスラエルのために、また私たちのためにも、長いこと多くの準備をして、私たちに自身キリストであること、王であることを示されます。

#### 4B 訪れの日の喜び

そして彼らは叫びました。「19:38 祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように。」喜びのあまり、大声で神を賛美して言ったとあります。主が救いを携えて来られる日は、大いなる喜びの日です。そして、御名によって来られる方、王にと叫んでいるように、それは主を礼拝し、賛美する日です。そして、天には平安があるように、とあり、平和の日であります。そして栄光があるようにとあるように、神の栄光が輝く日であります。

#### 2A 泣かれる主 41-44

人々がこのようにして喜んで叫んでいる時に、イエス様は、都のために泣いてしまいました。「41 エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。」泣かれていました。人々、弟子たちは喜んでいますが、主は泣かれています。今のイスラエルの建国の歴史の本で、心に残っている場面があります。それは、1947 年 11 月に、国連でユダヤ人の国とアラブ人の国を認める、分割決議案が通った時、エルサレムの町でみな喜び叫び、街では輪をつくって踊って歌っていました。けれどもその光景を見て、初代首相になるベン・グリオンは悲しみ、重い腰を上げて準備を始めました。必ずアラブ人たちは自分たちに戦って来るだろう、そして、ここで喜び叫んでいる若者の多くが戦いの中で命を落とすだろうということが目に見えていたのです。その喜びは本物ですが、しかし人のあり方、罪の性質を見れば、喜んでいて泣くこともあるのです。弟子たちが喜んでいてのは、全くその通りで、この方こそメシアであり、イスラエルを救う方です。けれども、これから起こることをイエス様は、目に見えていました。

#### 1B 目から隠されていた日 41-42

「42 もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。」とイエス様は言われました。どのようにして、平和の道がエルサレムの目から隠されていたのでしょうか？

### 1C 商売(保身)

いろいろ考えられますが、この後、45 節でイエス様は宮の中の商売人たちを追い出し始められました。神の宮では祈らなければいけないのに、自分の損得で動いていたのです。人は罪深いですから、「自分の得になるかどうか？」ということで行動しています。そして、神についての事柄でさえ、自分の得になれば求めるし、そうでなければ、離れます。あるいは、自分に都合のよいことを言ってくれる人のところに行きます。自分の生活が基本的に変わってほしくないのです。変わらないうで、その中で神が自分に益をもたらしてくれるなら、神をあがめようと言います。

### 2C 宗教指導者への依存

また、宗教指導者に依存していることも、目が隠される原因です。47 節には、祭司長たち、律法学者たちが、どうにかしてイエスを殺そうと考えていました。そして 20 章には、彼らがイエス様の權威に挑みかかり、それから様々な詰問をして罾にかけて、捕えようしました。そして、イエス様がピラトのところ連れて行かれた時に、ピラトが無実であることをよく知っていたので、群衆のところはどうすればよいか問い質したところ、祭司長たちが扇動したので、群衆は、「十字架につけろ」と叫びました。

聖書という、神の靈感によって書かれた言葉があります。神のことばなのです、神のことばは真理であり、私たちは信頼するに値するものであり、天地が過ぎ去っても、言葉は一つ一つ、決して過ぎ去ることはありません。ところが、そうではないと言う者たちがいます。そして、自分自身で聖書を調べるのではなく、「ああ、この人たちの言っているほうが、自分に都合がいいから。」として、聖書の言葉ではなく、作り話のほうにそれていくようになるのです。パウロが牧者であるテモテに、教えました。「Ⅱテモ 4:2-4 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。」

### 3C 肉の誇り

そして、キリストを王として迎え入れるということは、ローマ人にとっては愚かしいことだったでしょう。イエス様がローマに引き渡された時に、兵たちはユダヤ人の王様といって嘲りました。キリストを王とすることは、恰好のよいことではないですね。そういった面子というか、自尊心があるので、キリストの平和の道が、見えなくされている、隠されているということもあります。

### 2B 平和の道を知らない都 43-44

そしてイエス様は言われます、「43 やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、44 しておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。」

### 1C 敵の包囲

このことは、紀元 70 年に文字通り起こりました。ユダヤ人がローマに対抗したのが紀元後 66 年、ユダヤ人反乱がおこりました。ローマから独立をするための戦争です。それで、ティトゥスが総督としてここに派遣され、戦います。エルサレムを包囲しました。この様子について、ユダヤ人の歴史家、ヨセフスと言う人が書いた「ユダヤ戦記」の中に詳しく書かれています。敵が包囲する様子が、生々しく書いてあります。

### 2C 子供たちへの虐殺

そして 44 節には、ローマ兵たちが町の中に入った時に行なったことです。これは古代において、しばしば行う残虐な行為であって、バビロンやメディアなど、そういった国々の兵も、子供たちを地面にたたきつけるというようなことも行います。イエス様が泣かれたのは、ご自身が苦しいめにあうとか、ご自身が受け入れられないとか、そういった自己中心的なものではなく、彼ら自身が平和とは裏腹の、剣の中に入れられてしまうのを見たからです。イエス様が十字架を担いでおられた時に、嘆き悲しむ女たちが付いてきていましたが、「23:28 エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい。」と言われました。

### 3C 積み残されない石

そして、都を徹底的に破壊したときに、「**彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積み残されたまま残してはおかない。**」と言われます。これも、文字通り起こりました。彼らは、神殿のところに火を付けてはならないと総督に命じられていましたが、誤って付けてしまいました。それで、火が燃え広がり、金箔が熱によって裂けた石の割れ目に入って行きました。それでその金を取り出すために、石を一つ一つ、取り下ろしたのです。今も、城壁のそばに、考古学者があえて、投げ出されたままの石、黒焦げになっている石をそのままにしているところがあります。

### 3B 訪れの時を知らない悲しみ

イエス様は、それらのものが全て見ておられて、どうしてそうになってしまうのか？を語られます。「**それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。**」とのこと。ここは直訳すると、「それは、おまえへの訪れの日を、おまえが知らなかったからだ。」ということです。自分たちのための神の訪れを、本人たちが知らなかったということなのです。これは情報がなかったということではありません。繰り返しますと、心を頑なにしているからそうなのであって、心の頑なさのゆえに、見えなくされているのです。

平和の道を私たちが拒めば、もちろん残りは剣しかありません。平和の道から離れれば、争いと戦いしか残りません。イエス様が自分にとっての王、平和の君であることを、今、呼びかけられている時にそうしてください。